祇園精舎と沙羅双樹

長嶺胃腸科内科外科医院
長嶺　信夫

1. アーナンダ菩提樹

「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらわす。おごれる人も久しからず、ただ春の世の夢の如し。猛き者もついには滅びぬ。ひとえに風の前の塵に同じ。」

あの有名な「平家物語」の巻頭の一節である。僧が亡くなるたびにひとりでに鳴りだすという祇園精舎無常院の鐘の音、釈迦入滅の際、時ならぬ花を咲かせ、黄から白にいっせいに花の色を変えたという沙羅の樹。はかない、移ろい行く無常の世界をあらわす名文としてあまりにも有名である。

夕闇せまる頃、祇園精舎に着いた。ああ、ここが祇園精舎なのだ。多くの人が一度は訪れてみたいと思う念願の地である。胸の高鳴りを感じる。オレンジ色の僧衣が行き交う中アーナンダ菩提樹に向かう（写真1）。やがて右手に根回り数メートルはありそうな巨木が見えてきた。インドの古代文献に記されている、かの有名なアーナンダ菩提樹（Ananda -Bodhi）の末裔である。

写真1．祇園精舎に向かう僧侶達。オレンジ色の僧衣が美しい。

文献には「ブッダ（釈迦）が布教のため祇園精舎を留守にしている間、ブッダの象徴として菩提樹を植えることをアーナンダ（阿難）が提案したのに対し、ブッダは高弟のマハーモッガラーナ（Mahamoggallana目連）をブッダガヤに派遣し菩提樹の分け樹を採取させ、その分け樹を祇園精舎の門の右側に植えさせた」と書かれている。そして、その樹を植えたのがほかでもない祇園精舎を寄進したあのスダッタ長者というのだ。

あらためてその位置を確かめる。たしかに門の右側にある。納得しながら菩提樹を眺めた。樹には聖樹であることを示す色とりどりの小旗が巻かれていて、人々がその樹の前にぬかずいていた。この菩提樹はアーナンダが提案したので「アーナンダ菩提樹」と呼ばれていたのだが、12世紀のイスラム教徒の仏教弾圧の際、僧院とともに破壊され、その後に生えた菩提樹が育っているという（写真2）。

2. 祇園精舎

祇園精舎はサンスクリット語ではJatavana-

写真2．アーナンダ菩提樹の前で。

viharaであり、その名称の由来は次のようである。

当時、ブッダや弟子達は同じ所に留まることなく、旅から旅の暮らしをしていたのだが、インドは雨季と乾季にわかれ、雨季には道路や橋が流されるため、遊行にはむかない。その上、雨季には地中から虫が這い出し、むやみに歩き回ると、罪のない虫を殺傷することになる。そういうわけで、遊行僧は雨季には雨安居（うあんご）と称し、空き家や洞窟で過ごし、そこで瞑想したり学んだりしていた。

インドの長者スダッタはコーサラ国の首都シュラーヴァスティーに住み、パセーナディ王の財務官をしていたのだが、孤独な貧者に惜しみない施しをし、そのため「アナータピンディカ：給孤独長者（ぎっこどくちょうじゃ）」とよばれていた。長者はブッダに帰依した後、遊行僧が雨季に逗留するための僧院を寄進しようと考え、僧院を建てるのに一番ふさわしい場所として豊かな森と小川に囲まれたジェータ（Jata：祇陀（ぎだ））太子の園林（vana）を選び、譲り受けたその土地に僧院（Vihara：精舎）を建てた。祇陀と園林を略して、祇園である。また祇陀と給孤独長者が寄進したことから、漢訳では「祇樹給孤独園（ぎじゅぎっこどくおん）」と称し、これも略して祇園である。スダッタ長者がその園林を買い取るため、その土地に黄金を敷き詰めたというのは有名な話である。祇園精舎が完成した後、ブッダは24年間にわたり雨季には祇園精舎に逗留し、瞑想や説法をして過ごし、乾季には北インド地方の布教の旅に出かけている。文献によると、ブッダは祇園精舎があるシュラーヴァスティーに75回も訪れている。

精舎内にはブッダの住居跡や説法した場所、遊行僧などが起居した住居跡、沐浴場などがあり、いまだ発掘調査が続けられており、広大な遺跡公園になっている（写真3）。

写真3．ブッダの住居跡前にて、後方中央は無憂樹。

3．無憂樹と沙羅双樹

門を入ると左手に無憂樹の樹が植えられていた（写真4）。マーヤー（摩耶）夫人がお産のために里帰りの途中、ルンビニー園で美しく咲いているこの樹の花を手で折ろうとした際に産気づき、その樹の下でブッダを出産し、お産が軽かったためこの名がつけられたと言われている。サンスクリット語ではアショカ（Ashoka）の樹と呼ばれ、「ア」は「否定」を、「ショカ」は「憂い」を意味し、英語名でもSorrowless　treeと呼ばれている。そのため無憂樹は東南アジアなどの仏教寺院でよく植えられているのだが、インドではブッダは無憂樹の下で産まれたのではなく、沙羅の樹の下で産まれたと記載された

写真4．無憂樹の前で、同じマメ科のゴールデンシャワーの樹に似ている。

写真5．僧の沐浴場。右後方の樹は沙羅の樹。

文献が多い。これらのことは別の機会に詳述したい。また、インドにはマメ科のこの無憂樹（アショカ）のほかにもスギのように直立したアショカと呼ばれる樹があるがバンレイシ科のマストツリーというまったく別種の樹である。

祇園精舎を歩きながら、「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響あり・・・」と自然にその一節が口から出てくる。瞑想しながら口ずさんでいる人もいる。「ここで、ブッダが弟子と人生を語り、瞑想し、教えを説いたのだ」そう思うと己の日々の生活が恥ずかしくなってきた。

現地添乗員の説明も上の空、精舎の中の潅木の下や草むらに眼をそそぎながら皆の後を追う。リュックの中には沖縄から持ってきたプラスチック製のヘラを忍ばせている。今回のインド訪問（2006年10月20～28日）の目的のひとつ、無憂樹の苗木を持ち帰るためである。ツアー仲間は50メートルほど先を歩いている。しかし無憂樹の苗木は見当たらない。家内が急いで引き返してきた。添乗員が左手かなたの樹が沙羅の樹だと言っていると言うのだ（写真5）。今回の最大の目的、沙羅双樹の樹！急いでその樹に駆け寄り、見上げる。じっくり見とれている時間はない。仲間はどんどん先に進んでいく。

写真6．沙羅の樹。右側の細い木はチークの幼木。

急いでカメラのシャッターをきり、樹の根元を見るが苗木や種子は見当たらない（写真6）。仕方がない、明日、クシナガラに行く・・・翌日に期待をつなぎ、その場を離れた。

すでに辺りは薄暗くなっている。次の目的地、スダッタ長者の屋敷跡に向かった。明日は釈迦入滅の地クシナガラを訪ね、念願の沙羅（双）樹の苗木を手に入れなければならない（2006年12月記）。

参考文献

B.R.アンベードカル　山際素男（訳）：ブッダとそのダンマ　光文社　2004年